

## 論文題目

働くことにおける幸せの再定義に向けた探索 アフリカを含む複数国勤務経験者 12 名およびホンダ・マニファクチャリング・ナイジェリアの事例から

山平 泰子

## 論文要旨

本研究は、先進国よりもアフリカで働く方が幸せであるという仮説をもとに、働くことにおける幸せの再定義に向けた探索である。背景には Hardt & Negri(2000)や Ekman (2013) が議論する、人間の個人的かつ実存的側面までもが生産性の源泉として常時利用可能なソーシャルファクトリー化された社会において、働く者の幸せやマネジメントが搾取手法の一つとなっている側面がある。美しく壮大なビジョン、目標、オーセンティシシー、称賛など幻想による組織あるいは働く者自らへの利益の収斂に資する研究ではなく、働く時間は生きる時間、人生の時間という観点から、働くことにおける本質的な幸せの議論を深めることを試みた。

第 1 章では、働くことにおける幸せの視点の転換による再定義に向けた意義を示した。第 2 章では、人生の幸せ、働くことにおける幸せの議論や先行研究を批判的議論含め確認、整理した。第 3 章では、アフリカ文脈の働くことにおける幸せの先行研究のシステマティックレビューを行い、ほぼ全ての研究がアフリカでの西洋の研究やモデルの再現であったが、間接的にアフリカの特徴を示唆する研究も確認した。第 4 章では、実証研究で援用する Affective Event Theory, フッサールや木村敏の現象学的議論, Oishi et al. (2020)のハッピーな人生、意義のある人生、心理的に豊かな人生の概念枠組み、アフリカの経済的富と社会的富両方の実現を目指す内発的経済哲学 Africapitalism を概観した。第 5 章では、アフリカを含む複数国企業勤務経験者 12 名の事例を分析した。第 6 章ではナイジェリアで 40 年以上稼働するホンダ・マニファクチャリング・ナイジェリアの事例を分析した。第 7 章では結論として、ナイジェリアやケニア、ガーナの日本人駐在員やインド人駐在員の働くことにおける幸せの源泉として確認された、現地との一体感、生きている感覚、心が通じ合う感覚、現地への貢献の実感、ゆったりとした時間の流れ、人と人との質の高い繋がり、アフリカ出身メンバーの幸せの源泉、仮説が支持されなかった要因を考察した。働くことにおける幸せの深い実感は、極めて不安定で不確実性の高いアフリカのビジネス環境の中を進むエネルギーとなっており、またその後の勤務地において時間や距離を超え本人のエネルギーとなり人生や組織に波及していることも確認された。